第二次世界大戦の戦跡における日本人観光者のダークツーリズム経験
――タイ・カンチャナブリの事例――

Dark Tourism Experiences amongst Japanese Tourists at World War II Heritage Sites
− the Case of Kanchanaburi, Thailand −

薬師寺浩之*

要　旨

本稿はタイ・カンチャナブリを事例として、第二次世界大戦の戦跡における日本人観光者のダークツーリズム経験について考察する。研究方法は、第二次世界大戦期に日本軍によって建設された泰緬鉄道とクウェー川鉄橋、さらにカンチャナブリに立地する戦争博物館三施設を訪問した日本人観光者が旅行レビューサイトに書き込んだコメントの内容分析である。

タイ中部に位置するカンチャナブリは、泰緬鉄道（別名「死の鉄道」）と車窓から見ることができるのどかな風景、街のランドマークとして知られるクウェー川鉄橋で有名である。日本人観光者に人気があることから、バンコクに所在する複数の日系旅行代理店が、日本語ガイド同行の日帰りツアーを毎日催行している。同地の観光地としての人気は、1957 年公開の映画『戦場にかける橋』によるところが大きい。この叙事詩的映画は、これまでに制作された数々の戦争映画の中でも最も有名な作品の一つである。この物語は、日本人が連合軍捕虜を酷使して鉄道を建設したという歴史的事実に基づい

＊奈良県立大学地域創造学部准教授

ている。

多くの日本人観光者は、この歴史的事実をカンチャナブリ訪問前にガイドブックや旅行情報サイトなどを通して理解している。現在では観光対象となっていても、それは先祖が連合軍捕虜やアジア系労働者を酷使して建設させた、という事実に対して複雑な気持ちになっている観光者は多い。しかし、彼らの訪問理由は、「理想的」で「倫理的」なダークツーリズムサイト訪問者の行動とされる負の歴史をより良く理解し犠牲者を悼むことよりも、単に映画で有名な場所を訪問し、映画に登場する鉄道に乗車し、風景を鑑賞することに比重が置かれている。

多くの観光者は、市内に点在する戦争関連博物館（JEATH 戦争博物館、アートギャラリー＆第二次世界大戦博物館、泰緬鉄道博物館）の一カ所もしくは複数個所を訪問する。これらの博物館では、第二次世界大戦時の日本について批判的な立場をとった展示と説明がされている。彼らはこのような展示や説明に対して、多種多様な反応を示す。第二次世界大戦中のカンチャナブリでの先祖が行ったことを日本人として申し訳なく思う者もいれば、自分自身の歴史の無知を反省する者もいる。一方で、日本が侵略者であることや悪であると表現されていることについて苛立ちや不快感を示す者もいれば、客観的史実に基づいていないと主張する者もいる。さらに、展示や説明内容にまとまりや一貫性が無かったり、日本語による説明も不足していたり、不正確な日本語で説明されていたりすることが原因で、展示内容に関して何ら感情を抱けないとする者も多くいる。これらの反応は、第二次世界大戦の史実に対する最近の日本人が抱く多様な態度を反映している。カンチャナブリの戦争関連博物館を訪れる日本人観光者の反応は、学校での歴史の授業で学んだこと、そしてメディアで見たことによって形成された第二次世界大戦に対する彼らの価値観・態度や知識が反映されていると考えられる。

Abstract

This paper aims to explore dark tourism experiences amongst Japanese tourists at World War II heritage sites through a case study based on Kanchanaburi, Thailand. The research methodology is content analysis of review comments about experiences at Kanchanaburi's several war-related sites.

Kanchanaburi, where is located in the west of Thailand, is famous for Thai-Burma railway（Death Railway）and awesome view from the train, and the Bridge on the River Kwai（railway bridge）which is a city's landmark. The region is popular with Japanese tourists. Many local travel agencies organize day trip tour with Japanese speaking guide from Bangkok. The popularity of the region as tourism destination is attributed to the movie *The Bridge on The River Kwai* released in 1957. This one of the most famous war movies ever made is an epic World War II adventure film. Its story is based on the historical fact that Japanese had a railway built using prisoners of war（POW）. Whilst many Japanese tourists know this historical fact, their travel motivation is not strongly related to dark tourism which is to understand the history better and to mourn the victims. However, when they visited Kanchanaburi's there war related museums, JEATH War Museum, World War II Museum, and Thai-Burma Railway Centre, they unexpectedly encounter and recognize the historical facts that Japanese invaded and assaulted Thailand. Their presentments and explanations take a critical stance on Japan.

Tourists react to this situation in a variety of ways: feeling sorry for their ancestors' past conduct; showing their own ignorance of history as related to their ancestors' past conduct; feeling uncomfortable with the exhibitions and explanations of the museums that depict Japan as diabolically evil; expressing disapproval of the exhibitions and explanations in the museums because they

are biased; and revealing little emotion or sensibility due to finding the exhibitions disorganized or boring, or due to a lack of explanations in Japanese (or poor Japanese translations). These reactions reflect the recent multiplicity of opinions about the Japanese during World War II. The reactions of Japanese tourists who visit the three war-related museums in Kanchanaburi are defined by their attitudes and knowledge of the past, which are shaped by what is learnt in history classes in school, and by what we have seen in the media.

キーワード：ダークツーリズム、日本人観光者、第二次世界大戦、戦争博物館、カンチャナブリ、タイ

Key words：dark tourism, Japanese tourists, World War II, war museum, Kanchanaburi, Thailand

1. はじめに

本稿はタイ・カンチャナブリを事例として、第二次世界大戦の戦跡における日本人観光者のダークツーリズム経験について考察することを目的とする。研究方法は、第二次世界大戦期に日本軍によって建設された泰緬鉄道とクウェー川鉄橋、カンチャナブリに立地する戦争博物館三施設を訪問した日本人観光者が旅行レビューサイト（tripadvisor.jp と 4travel.jp）に書き込んだコメントの内容分析である。これら二つの旅行レビューサイトは、多数の日本人観光者が旅行時に参照するサイトであり、訪問者によるコメントの書き込みが多い。

タイ中部に位置するカンチャナブリはタイの首都バンコクの西 150km にあり、バンコクからカンチャナブリまでは車またはバスで約 2.5 ～ 3 時間かかる。このような地理的な好条件から、カンチャナブリはバンコクからの日帰り旅行や週末の短期休暇に理想的な場所と認識され、年間 400 万人以上の

観光者が訪問する国内外の観光者問わず人気の観光地である（Puelm, 2015）。泰緬鉄道（Thai-Burma Railway）（別名「死の鉄道」（Death Railway））の車窓から見えるのどかな田園風景と、街のランドマークとして知られる全長300mのクウェー川鉄橋（the Bridge over River Kwai）（図1）が有名である。日本人観光者に人気があることから、バンコクに所在する複数の日系旅行代理店が、日本語ガイド同行の日帰りツアーを毎日催行している。同地の観光地としての人気は、1957年公開の映画『戦場にかける橋』（*The Bridge on the River Kwai*）によるところが大きい。この叙事詩的映画は、これまでに制作された数々の戦争映画の中でも最も有名な作品の一つである。この物語は、日本人が連合軍捕虜（Prisoner of War / POW）を使って鉄道を建設したという歴史的事実に基づいている。

カンチャナブリに関する旅行情報やツアー募集広告／サイトには、泰緬鉄道は第二次世界大戦中に日本軍主導で建設されたことが記述されているため、同地を訪れる日本人観光者もこの事実は知ったうえで訪問しているものと考えられる。ただし、日本語で書かれたこれらには、日本軍のアジアでの勢力拡大のために建設が進められたことや、連合軍捕虜を酷使して建設されたことなど、泰緬鉄道建設に関する負の事実についてはほぼ書かれていない。これらの記述では世界的に有名な観光鉄道路線である泰緬鉄道に乗車し、世界的に有名なクウェー川鉄橋を訪問するということに主眼が置かれており、その背景にある歴史的事実は陰に隠れているため、ダークツーリズム的な要素は感じられない。一方で、多くの日本人観光者はカンチャナブリ滞在中、市内に点在する戦争関連博物館（JEATH戦争博物館、アートギャラリー＆第二次世界大戦博物館、泰緬鉄道博物館）の一か所もしくは複数か所を訪問する。これらの博物館では、第二次世界大戦時の日本について批判的な立場をとった展示と説明がされている。

これらの博物館での展示や説明文章に接して、母国が戦争加害国として批判的に示されていることに対して、日本人観光者が困惑を示すことは容易に

想像できる。さらに、日本人にとっては郷愁を感じることができるのどかな田園風景が現在でも見られる観光鉄道路線である泰緬鉄道は、祖父母や曾祖父母の世代による戦争が基となって作られていることを理解して困惑するかもしれない。中には鉄道路線建設中に亡くなった日本軍兵や連合軍捕虜などを悼む一方で、博物館の展示は歴史を歪曲しているとして不快感を示すものもいるかもしれない。

戦争や虐殺、災害などに関する博物館の展示は、被害を被った地域住民の政治的・イデオロギー的な立場が反映され、さらに、過去の悲惨な出来事についての特定の政治的解釈が影響する。過去に負の出来事が起こった場所やそれに関する博物館では、展示や説明の方法が真実を伝えるために、誇張したり厳しい批判を行ったりする傾向がある（Sharpley, 2009）。他方で、過去に悲惨な出来事が起こった場所であっても楽しい観光地として宣伝され、観光者にはそのように認識されるところもある。このような場所では、過去は特定の利害関係者によって歪められたり、無かったことにされたりする（Sharpley, 2009）。ガイドブックやツアー募集広告／サイト、さらにタイ国政府観光庁（Tourism Authority of Thailand / TAT）によるカンチャナブリに関する記述は、楽しく景色の良いリゾート地、および世界的に有名で実際に乗車することができる鉄道遺産がある場所（詳細な歴史的事実は封印されている）というメッセージに偏っている。一方で、市内にある戦争関連博物館三施設では、自国・自民族優越主義や愛国主義を促進させたり、日本を批判したりすることでは無く、平和を促進し、後悔を示し、和解と贖罪に向けて努力することを究極の目的としているものの、第二次世界大戦時の日本について批判的な立場をとった展示と説明がされている。これらの博物館の展示物や説明は、悪・敵としての日本・日本軍と犠牲者としての連合国・連合国捕虜という二項対立から成り立っているのである。第二次世界大戦時の「侵略者」とみなされている国から来た日本人観光者は、展示物や説明を見た時に当惑するのを避けられないであろう。過去の悲劇的出来事は博物館を運営す

図１　クウェー川鉄橋
2017 年 12 月筆者撮影

る人達の立場をもとに解釈されており、それらはしばしば対立を引き起こす。特に、戦争加害国・地域からの観光者と戦争被害国・地域の地域住民（博物館運営者）、という構図が成り立つとき、対立は顕著となることが多い。両者とも、この対立的な状況が遺産とアイデンティティの関連性の強化につながることもある（Witcombe, 2016）。

2. 文献レビュー

2.1　ダークツーリズムと観光者の経験

Lennon and Foley（2000）によって造られた用語であるダークツーリズムは、死や苦しみなどと関連する場所（戦争・虐殺・災害等の場所）を訪れる観光活動のことを指している。特に生きている記憶の中で起こり、さらにメディアの注目を集めている（集めた）出来事がダークツーリズムの対象となる。欧米諸国におけるダークツーリズムの人気の高まりは、グローバルなメディアの力に強く影響されている（Lennon and Foley, 2000）。メディアは紛

争や災害のニュースを映像や写真を交えて、最新の情報を絶え間なく流し続けることがある。このメディアの報道は、その悲劇的な出来事が起こっている（起こっていた）場所を訪問してみたい、という欲求を作り出すきっかけとなる。このような人々（ダークツーリズムをする観光者）にとって、犠牲者を弔うために「そこにいる」ことと「本物を見ること」は非常に重要である。近年の世界の移動人口の増加に比例するように、このような観光者も増加している。

死と災害に関連する場所へ旅行することは、決して目新しいことでは無い。最近では、ダークツーリズムの活動の幅が広がったり、それに分類される場所の数が増えたりしている(Stone and Sharpley, 2008)。ダークツーリズムに分類される場所は、戦争、大量虐殺、暗殺、テロ攻撃、そして大規模な事故の現場など、伝統的に観光者が訪れている場所だけでなく、軍事や民間人の墓地、旧刑務所、死体収容所、有名人の死に関連した場所、大規模な自然災害が発生した場所、さらに幽霊や死後の世界に関連する場所などにまで拡大した（Williams and Lew, 2015)。

このような場所を訪問する観光者には様々な動機が存在し、それは観光者の行動パターンを規定する。訪問動機は、教育的、記念的、追悼的、さらには娯楽的目的を含む。一部の観光者にとっては、凄惨な事件・事故の現場を自分自身の目で直接目撃したいという野次馬的な動機（これはより人間の本能的な動機である）に基づくこともある（Williams and Lew, 2015)。ダークツーリズムを行う観光者の主要な動機は、教育的側面（人類の負の歴史を学び、同じ過ちを犯さないようにするため）と追悼的側面があることは良く知られているが、彼らがそのようなことを真剣に行っているとは言い難い。多くのこのような場所では、惨劇に関する訪問者へのメッセージ（それらは教育的であり政治的でもある）と観光商品としての商品化との間の境界は曖昧になってきている（Sharpley, 2009)。

Lennon and Foley（2000）は、このような場所を訪れる人々は主に欧米系

観光者であり、彼らの多くはそこを訪問する明確な目的を持っていないと説明する。彼らはパッケージツアーの旅程に組み込まれていたから訪れた、訪問先の近くにこのような場所があったら寄ってみた、程度の訪問動機であるという。ダークツーリズム研究は、これまでのところ Lennon and Foley（2000）によって指摘された観光者を見落としている。つまり、ダークツーリズムサイトを訪れる多くの観光者は、過去の悲劇的な出来事を理解し、犠牲者を弔うことに動機づけられているわけでは無く、受動的である。

マーケティング的側面からみると、負の歴史がある場所であっても「ダークツーリズム」の場所として積極的に宣伝されないことは多い。それは、「ダークツーリズム」という言葉が、死、苦しみ、悲劇などのイメージを呼び起こすためである。死や苦しみ、悲劇などが起こった場所であっても、観光供給者側がその場所を「観光されるべきダークネス」として構築しなければ、「ダークツーリズム」の対象にはならない。地域の政治性が、ダークネスに対するまなざしを創り出している（遠藤，2016）。カンチャナブリの場合も、この指摘があてはまる。タイ国政府観光庁（TAT）は、ダークツーリズムの目的地ではなく高地のリゾート地（図 2）として積極的に宣伝している（岩田，2002）。そもそも、タイ人の遺産の概念は、王宮と仏教の遺跡に焦点が当てられており、この種の戦争関連の遺産は彼らの遺産の概念と一致しない。そのため、クウェー川鉄橋も泰緬鉄道もタイ人の遺産リストには載っていない（Witcomb, 2016）。Braithwaite and Leiper（2010）によると、多くの観光者にとってはカンチャナブリでの旅行経験はエンターテイメント的要素が強い。わずかなインフォテイメント（楽しませる形で事件や事実を伝える手法）が提供されているに過ぎず、過去の悲劇的な歴史的背景はほとんど無視されているという。したがって、カンチャナブリを訪れる日本人観光者の大多数は第二次世界大戦時に日本軍主導で泰緬建設が建設されたという歴史的事実は知っているものの、そこを「ダークツーリズム」の場所であるとはみなさない傾向があると考えられる。泰緬鉄道やクウェー川鉄橋

などのカンチャナブリのランドマークよりも第二次世界大戦の惨劇を感じ取ることができる戦争博物館三施設を訪れるのは、ツアーの旅程に組み込まれているから、旅行情報サイトがカンチャナブリで「見るべき」施設と紹介するから、といった受動的なものであることが考えられる。

Braithwaite and Leiper（2010）が実施した調査によると、カンチャナブリを訪問する観光者（日本人観光者限定ではない）は三種類に分けられる。一つ目は鉄道建設に携わった連合軍捕虜の労働現場や博物館を訪問して当時の状況を理解し、さらに捕虜の墓地を訪れ死者を弔うことを目的とした者である。犠牲者の遺族がこのタイプの訪問者であることが多く、欧米系観光者が大多数である。二つ目は文化観光者的動機を持った者であり、地域の伝統文化や寺院、食などに興味がある。三つめはリラクゼーションを目的とした者であり、最大のグループである。彼らの動機は、休息、娯楽、そして有名なクウェー川鉄橋を見学することである。彼らの調査の結論では、カンチャナブリでのダークツーリズムは戦争墓地、戦争関連博物館、そして元捕虜収容所が対象であり、そのような場所を「真剣に」訪問する最初の巡礼的な観

図２　泰緬鉄道とカンチャナブリのリゾート施設
2017 年 12 月筆者撮影

光者だけが、ダークツーリズムを目的とした観光者であると主張される。それ以外の大多数は、「ライト」な観光者として説明されている。

2.2　現代日本人の第二次世界大戦に対する理解

個人の性格、価値観、知識、および規範が、観光者の旅行経験、解釈、および旅行満足度に影響を与えることは明らかである。日本人観光者各人が持つ平和に対する態度と第二次世界大戦に関する知識が、カンチャナブリの戦争関連博物館での展示や説明に対する反応に大きな影響を与えるであろう。そこで、現代日本人の第二次世界大戦に対する集団的態度と知識の程度を理解することが重要となる。

第二次世界大戦が終戦を迎えてから70年以上が経過した現在において、その出来事を理解することはますます困難になっている。戦争を経験していない私たちの認識は、学校の歴史の授業で学んだこと、そしてメディアで見たことによって形成されるに過ぎない（Bode and Heo, 2017）。歴史の授業で習った第二次世界大戦に関する内容、およびメディアのそれに関する表現は、態度と知識の形成に大きな影響を与える。

中学校と高校の日本史の講義カリキュラムにおける第二次世界大戦に関する記述は、日米関係と植民地化された東アジア地域に焦点が当てられている。一般的に日本社会では、戦争の歴史と反省を踏まえより良い未来のために平和の重要性が主張されるが、戦争や戦争責任についての公での討論は限られてきた。その一つの理由は昭和天皇が戦後も在位したことにあるとされる。この多少なりともダブルスタンダード的な状況は、昭和天皇が崩御した1989年まで続いた（吉田，2005：Bode and Heo, 2017）。1990年代、第二次世界大戦に対する日本人の態度は徐々に変化した。しばしば日本と東アジア諸国間の外交紛争の原因となる南京大虐殺といわゆる「慰安婦」について、日本のメディアが取り上げ議論されるようになった。特に戦後の日本社会・歴史学界や教育学界でみられる日本人が日本人自身を侵略者・悪として捉

え、特定の歴史観を批判・否定して歴史の負の側面を強調する一方、正の部分を過小評価し日本を貶めるという自虐史観を変革しようという風潮も一部で生まれた。つまり、第二次世界大戦史をより「ポジティブ」な語りに変革しようとする試みである（Fackler, 2015）。この歴史修正主義的アプローチも、日本のメディアでより積極的に議論されるようになりつつある。

日本人にとって、第二次世界大戦期に関する知識を得たりそれに関する認識を形成させたりするうえで、歴史教科書は非常に重要である。それは、時系列的かつ中立的な方法で歴史が記述されている傾向がある。ただし、戦争に関わる多様な意見や考え方を生徒に提供して議論をしたり、物議を醸す事柄に関して踏み込んだ議論を行ったりはしていない。さらに、日本史の授業において、第二次世界大戦期を含む近現代史を教えることに費やす時間は、中世日本史と比較して短い。日本の歴史教育は、第二次世界大戦に関する批判的議論を通して平和を考えることよりも、試験対策のために事実を暗記することに重点が置かれている。Bode and Heo（2017）による調査は、現代の日本人の大多数が第二次世界大戦に関する知識に自信が無いこと、さらにその話題について議論することができない、もしくは議論したくないと感じていることを明らかにしている。上述の歴史教育のスタイルは問題であり、日本人は戦争についての批判的思考を発展させる機会を奪われていると、彼らは調査で結論付けている。

このようなことを考慮すると、カンチャナブリを訪れる日本人観光者も第二次世界大戦に関する知識に自信を示さないかもしれない。一方で、各観光者が持つ第二次世界大戦に対する態度が、戦争関連博物館での展示や説明に対する反応に影響を及ぼすことを考慮すると、自分自身の歴史の無知を示す観光者、展示・説明内容に不快感を抱く観光者、客観的史実に基づいていないと主張する観光者、さらに明確な態度を示さない観光者など、多様な反応を観光者が示すことが想定される。

2.3　泰緬鉄道の歴史と第二次世界大戦関連博物館

第二次世界大戦中の 1942（昭和 17）年 6 月、日本軍はビルマ戦線の物資輸送のためのルートを確保するために、タイ・バンコク郊外のバンポン（Ban Pong）と英領ビルマ（現ミャンマー）のタンビザヤ（Thanbyuzayat）の間の 415km を結ぶ鉄道の建設を開始させた[1)]（図 3）。タイからビルマへの輸送ルート（道路）は貧弱で険しい山道が続いていたことから、多数の軍隊や物資を効率的に運ぶには不適切であったことが、日本軍が泰緬鉄道建設に踏み切った理由である。建設開始からわずか 1 年 4 か月後の 1943（昭和 18）年 10 月、泰緬鉄道は完成した。日本人エンジニアは泰緬鉄道を完成させるには 5 年はかかるだろうと推定していたが、実際には日本軍は建設に従事していた労働者に 16 ヵ月で鉄道を完成させることを強いた。ほとんどの作業は、簡単な道具を使って人間の手によって行われた。日本軍が完成予定時期を早めるにつれて、労働条件や生活条件は悪化したという。過酷な労働のもと、多数の労働者（24 万人の労働者のうち約 10 万人）が建設中に命を落としたため、この鉄道は「死の鉄道」（Death Railway）と呼ばれるようになった（Lonely Planet Publications, 2012; Puelm, 2015）。正確には、18 万人の東南アジアの民間労働者と 6 万人の連合軍捕虜（オーストラリア人、イギリス人、オランダ人など）が建設に従事し、約 9 万人の民間労働者と 1 万人の連合軍捕虜が死亡した。初代クウェー川鉄橋（木製）は、連合軍が 1945 年に爆撃したため、使用されたのはわずか 20 ヵ月のみであった。現存する鉄橋（鉄製）は、戦後建設されたものである。

戦後、鉄道建設中の悲劇的な出来事は、オスカー賞を受賞した叙事詩的映画『戦場にかける橋』（*The Bridge on the River Kwai*）が公開される 1957 年までほとんど忘れられていた。これはフランスの小説家ピエール・ブール（Pierre Boulle）によって書かれた同一タイトルの小説に基づいている（フランス語タイトルは *Le Pont de la Riviere Kwai*）。史実が歪曲されているという批判も絶えないが、これまでに制作された数々の戦争映画の中でも最も有

名な作品の一つである。この映画は悲劇の視覚化に貢献し、それを公の記憶に持ち込んだ（Puelm, 2015）。この映画によってカンチャナブリが観光地として確立されて以降、三施設の戦争関連博物館が市内に開設された。各博物館の詳細は以下の通りである：

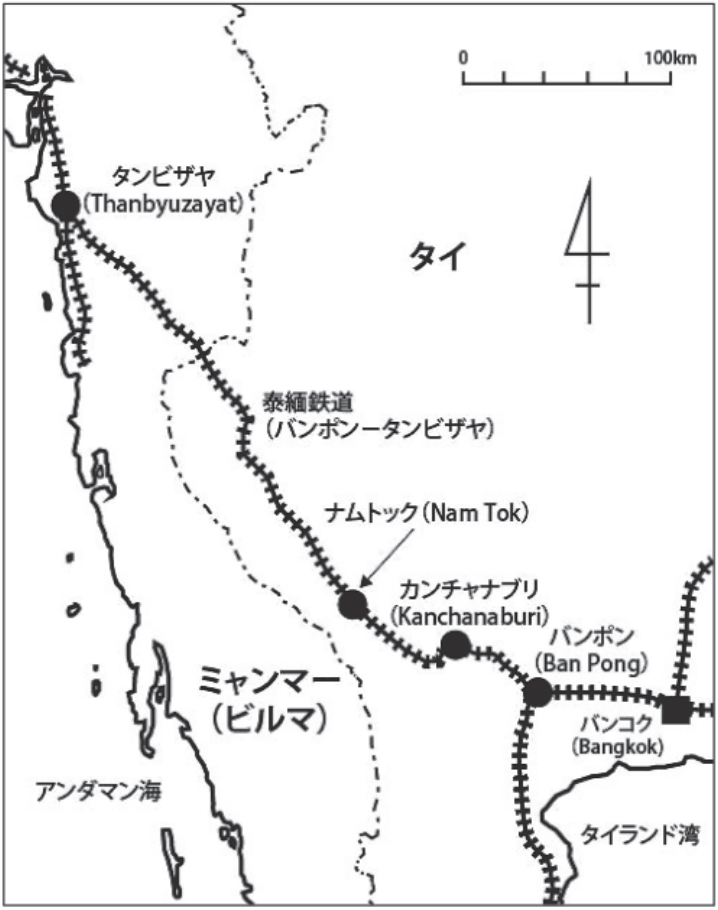

図３　泰緬鉄道の地図
筆者作成

○　JEATH 戦争博物館（JEATH War Museum）

JEATH 戦争博物館（図 4）は、1977 年に隣接する Wat Chaichumphon（Wat Tai）の僧侶によって開設されたカンチャナブリで最も歴史のある戦争博物館である。JEATH は、鉄道建設に関与した国々の頭文字を表す。それらの国々とは日本（Japan）、イングランド（England）、オーストラリア（Australia）、米国（America）、タイ（Thailand）、そしてオランダ（Holland）である。博物館の設立趣旨は、連合軍捕虜が日本軍の下で鉄道建設に携わっていた時の悲惨な生活状況を説明することである。博物館のスローガンは「（日本軍を）許すが（戦争のことは）忘れない」（forgive but not forget）と「戦争中に苦しんだすべての人々に関する記念館」（a memorial to all who suffered during the War）である（Rungchawannont, 2015; Braithwaite and Leiper, 2010）。捕虜に関する写真は粗末で、熱く湿気のある竹小屋で展示されている。この竹小屋は、鉄道建設中に使われた捕虜の収容所の複製であり、捕虜が置かれていた劣悪な環境に対する悲しみと怒りの雰囲気を醸し出している。博物館の展示や説明は、鉄道建設における JEATH 諸国の役割を強調している。全体的には同盟国側の視点に偏っており、鉄道建設を実行した日本軍に対しては批判的である（Arrunnapaporn, 2012）。JEATH 諸国の内、日本とタイ以外の 4 カ国（イギリス、オーストラリア、アメリカ、オランダ）は、捕虜として強制的に建設に関与させられたことが強調されている。一方で、地元のタイ

図 4　JEATH 戦争博物館
2017 年 12 月筆者撮影

は建設に協力した国としてでは無く、征服した国として強調されている。実際には、JEATH 諸国だけでなくビルマ、ジャワ、朝鮮、台湾などからも労働者が鉄道に携わっていたが、これらの人々はアジア系労働者であり連合軍捕虜では無いことから、当博物館では詳細な説明がみられない。つまり、上述の通り博物館のスローガンの一つは「戦争中に苦しんだすべての人々に関する記念館」であるが、実際は全ての人々に関しての展示や説明がされておらず、誤解を招く結果となっている（Rungchawannont, 2015）。さらに、博物館に展示されている武器は第二次世界大戦時のものでは無く、後のベトナム、カンボジア、ラオスで戦争や内戦時に使用されたものである（Arrunnapaporn, 2012）。

同博物館の訪問者は、一時間に数組程度である（2017 年 12 月と 2019 年 8 月の同博物館訪問時の目視調査による）。訪問者はほぼ全て外国人観光者であり、日本人のツアー参加者も訪問していた。日本人のツアー参加者の滞在時間は僅か 10 分程度であり、泰緬鉄道の乗車時間前に立ち寄っているようである。ガイドが泰緬鉄道について詳しく説明をするようなことは無く、ツアー参加者は写真を淡々と無言で見て回り、すぐに泰緬鉄道乗車駅であるカンチャナブリ駅へ車で移動していった。

○　アートギャラリー＆戦争博物館（Art Gallery & War Museum）

クウェー川鉄橋下流側に建つ中国風建築の建物が、アートギャラリー＆戦争博物館（図 5）である。この私設博物館は、地元の裕福な宝石商によって 1993 年に設立された。地元の人々から多くの工芸品を購入した創設者は、彼の個人コレクションを博物館として公開している。博物館には、鉱石、宝石類、硬貨、タイの歴史、ミスタイランドコンテストなど、戦争とは無関係のものも数多く展示されており、博物館の全体的なメッセージは不明である。第二次世界大戦関連の展示は、当時の写真・バイク・紙幣や捕虜を輸送するために使用された貨車などである。博物館入り口にある蒸気機関車は、当館

図５　アートギャラリー＆戦争博物館
2017 年 12 月筆者撮影

のハイライトである（Rungchawannont、2015）。屋外の川沿いには、日本軍が３ヶ月で完成させたというクウェー川鉄橋のオリジナル木造橋の残骸があり、屋上からはクウェー川鉄橋全体を見渡すことができる。

地域の歴史に関する説明は壁に表示されているが、英語説明文は語訳がひどく、それが博物館としての価値を下げているとの批判もある（Lonely Planet Publications, 2012）。日本語説明文は、日本人の支援を受けて設置されていることから理解できる文章ではあるが、タイ語や英語の説明文と比較すると少ない。日本語説明文は英文同様、日本軍を侵略者として批判的に論じている。筆者が 2017 年 12 月と 2019 年 8 月に同博物館を訪問した際（いずれの訪問も休日の午後）、他の訪問者を見かけることはほとんど無く、戦争関連博物館三施設の中で最も訪問者数が少なかった。

○　泰緬鉄道博物館（Thailand Burma Railway Centre）

民間の博物館と研究所である泰緬鉄道博物館（図 6）は、泰緬鉄道の研究者であるオーストラリア人の歴史研究者 Rod Beattie によって 2003 年に開設された。オランダ政府と匿名のドナーが博物館の運営を支えている。主に連合軍捕虜の苦しみを説明している JEATH 博物館とは異なり、この博物館は教育に焦点を当てている。7 つのギャラリーに展示されているのは、日本が戦争を始めた理由、日本の戦争戦略、鉄道建設、アジアの労働者、そして最

図６　泰緬鉄道博物館
2019 年 8 月筆者撮影

も力が入れられている連合軍捕虜に関することである。教育的要素があるパネルや写真、鉄道建設に関する遺物などが、当時の状況を再現させている（Braithwaite and Leiper, 2010）。

Rungchawannont（2015）によれば、この博物館は泰緬鉄道の長所と短所を議論し、学術研究に基づいて説明しようとする唯一の博物館である。さらに、鉄道建設に携わったアジア系労働者を詳細に説明する唯一の博物館でもある。泰緬鉄道の建設の背景を客観的に調査し、真実を一般に提供することが目的であるため、鉄道建設の話が日本人と捕虜の両方の観点から説明されている。他の二施設と比較して、展示・説明方法は洗練されているものの、説明文の言語はタイ語と英語のみで、日本語での説明は無い。日本語説明文は無いものの、博物館出口に「泰緬鉄道センター感想文集」と日本語（のみ）で書かれたノートが置かれており、日本人訪問者に感想を求めている。ノートの書き込み内容を見ると、様々な感想が書かれていた。おおよそ本稿で考察している旅行レビューサイトに書かれたコメントと同じような内容で、後

述の通り5タイプのコメントが書かれていた。

この博物館は、他の二博物館と比較して訪問者数が多い（2017年12月と2019年8月の同博物館訪問時の目視調査による）。訪問者の大多数は欧米系観光者であり、日本人観光者やタイ人観光者を見ることはほとんどなかった。博物館の展示や説明が充実しているためか、他の二博物館と比較して入館料が高い（150バーツ（約520円），他の博物館はそれぞれ50バーツ（約175円））。

3. 研究方法

日本人観光者のカンチャナブリでのダークツーリズム経験を理解するために、泰緬鉄道、クウェー川鉄橋、戦争関連博物館三施設に関する旅行レビューサイト上でのコメントを集め、内容分析を行った。旅行レビューサイトは、日本人観光者によく利用されているTripAdvisor.jpと4Travel.jpを採用した。日本人観光者が日本語で書いたコメント、416件（TripAdvisor：297件、4Travel.jp：119件）を内容分析の対象とした（表1）。大多数のコメントは、カンチャナブリの2つの主要観光スポットである泰緬鉄道（乗車経験）とクウェー川鉄橋について書かれたものであり、戦争関連博物館三施設に関するコメントは少ない。コメントの執筆者は分析対象となった複数の施設に

表1　分析対象となった旅行レビューサイト上のコメント数

	Trip Advisor	4travel.jp
泰緬鉄道	86	コメント欄無し
クウェー川鉄橋	142	71
JEATH戦争博物館	33	25
アートギャラリー＆戦争博物館	8	15
泰緬鉄道博物館	28	8

tripadvisor.jpと4travel.jpをもとに筆者作成

ついて投稿していることが多いため、実際の投稿者数は総コメント数よりも少ない。

オンライン日記、ブログ、またはレビューサイトでのコメントの増加は、コミュニケーションチャネルだけでなく、観光地の宣伝や消費方法にも影響を与える。これらにおける観光者の記述は、観光者の観光商品や観光地に対する印象、知覚、思考および感情を表現していることから、観光商品や体験に関する解釈を明らかにする機会を提供するものである。対面で行われるインタービュー調査などでは、観光者は本音を語らないことが多いが、多くの場合匿名で自由に記述ができるオンライン日記、ブログ、またはレビューサイトでのコメントなどでは、観光者の本音を理解することができる（Banyai and Glover, 2012）。

本稿における内容分析は、ダークツーリズムサイトとしてのカンチャナブリに対する印象、泰緬鉄道の乗車経験、各戦争関連博物館での肯定的・否定的な感情、さらに各博物館での展示や説明に対する観光者の反応に注目して分析を進めた。

4. カンチャナブリでの日本人観光者のダークツーリズム経験

4.1　コメント投稿者の属性

コメント投稿者の大半は男性である（82.9％）。投稿者の年齢層は、35 － 49 歳（35.2％）または 50 － 64 歳（43.0％）のいずれかで、第二次世界大戦後に生まれた人達である。半数以上（57.8％）が一人旅である（ただし、彼らはカンチャナブリに公共交通機関を使用して単独で旅行したのか、それともバンコクからの日帰りツアーに参加したのかは特定できていない）（表 2）。

4.2　カンチャナブリでの日本人観光者の経験

ほぼ赤土の畑が続き、サトウキビ、パパイヤ、バナナ、時々牛。当時を

表２　コメント投稿者の属性

	人数	%
性別（合計 416）		
男性	247	82.9%
女性	51	17.1%
不明	118	
年齢層（合計 297）（tripadvisor.jp のコメントのみ）		
18－24 歳	4	2.4%
25－34 歳	14	8.5%
35－49 歳	58	35.2%
50－64 歳	71	43.0%
65 歳以上	18	10.9%
不明	132	
同伴者（合計 119）（4travel.jp のコメントのみ）		
同伴者無し	63	57.8%
友人	12	11.1%
同僚	2	1.8%
家族	13	11.9%
カップル・夫婦	14	12.8%
その他	5	4.6%
不明	10	

tripadvisor.jp と 4travel.jp をもとに筆者作成

思いながら景色を眺めていると、今こうしてタイの観光資源にもなっていることと合わせて感慨深いものがありました。（泰緬鉄道・2018 年 11 月乗車／ tripadvisor.jp）

鉄道ファンであれば間違いなく乗って見たい路線ではないかと思います。まあ、歴史的には相当に重いものを感じながらにはなりますが、よくぞこんな場所に鉄道を作ったものだと思わせる箇所もあります。それも木材で組み立てているのですから、捕虜の方々に相当数の死者が出たのも理解できます。（泰緬鉄道・2018 年 8 月乗車／ tripadvisor.jp）

旧日本軍による多大な犠牲のもと造られた鉄橋なので、日本人として素直に楽しんでいいのか。。。。観光客は欧米系や日本以外のアジア人が多く、日本人はあまりいなかったです。(クウェー川鉄橋・2017 年 12 月訪問／ tripadvisor.jp)

車内は冷房などもちろん無いのですが、車窓から入ってくる風が心地良く、外を流れるタピオカ畑も長閑で、また時折来る帽子やお菓子の車内販売も賑やかで、とても楽しく過ごすことができます。しかしこれが戦跡かと思うと複雑な気持ちになりますが・・・。(泰緬鉄道・2012 年 5 月乗車／ tripadvisor.jp)

泰緬鉄道に乗車してクウェー川鉄橋を渡り、さらに川沿いから鉄橋を眺めたり徒歩で渡ったりすることは、カンチャナブリを訪れるほぼ全ての観光者が行う行動である。ほぼ全てのコメント投稿者は、世界的に有名な泰緬鉄道の乗車体験と、クウェー川鉄橋見学に満足していた。数名の投稿者かは鉄道のメンテナンスの悪さと乗り心地の悪さ、さらに時刻表通りに運転されないことについて不満を記していたが、大多数は日本人が現代の日本の鉄道では体験できないノスタルジックな雰囲気を高く評価した。多くの観光者が、カンチャナブリが想像以上に観光地化されていることに驚き、泰緬鉄道も観光鉄道路線であることを理解している。一方で、現在では観光対象となっていても、それは先祖が連合軍捕虜やアジア系労働者を酷使して建設させた、という事実(この事実は、カンチャナブリ訪問前にガイドブックや旅行情報サイトなどで知識として得ている)と照らし合わせると、複雑な気持ちになるという意見が多い。鉄道の乗り心地は決して良くないが、それが一部の観光者にとっては泰緬鉄道建設中の厳しい環境を追体験することを可能にしているようである。数名の年配の投稿者は、鉄道乗車中に戦争経験のある両親の世代について考えた、とコメントしている。ただし、父親や祖父が実際に

泰緬鉄道建設に従事していた、というコメントは無かった。一方で、少数ではあるものの、地理的にも衛生的にも過酷な環境の中で祖先が鉄道建設を完了させたことを、日本人として誇りに思っている投稿者もいた。橋の上に貼られたプレート「YOKOGAWA BRIDGE WORKS TOKYO JAPAN」を見た時、彼らの誇りはさらに高まる傾向があるようである。

> 現地の環境が、観光目的を主眼に整備されていることもあり、事前に勉強していくことが正しい理解に役立つものと考えています。（2018 年 6 月訪問／ 4travel.jp）

> 歴史を理解し、日本人として訪れてほしい場所です。第二次世界大戦中に日本軍が造らせた木造の橋が残っており、今も電車が走っていて、その橋を歩いて渡ることもできるカンチャナブリを代表する観光地の一つです。ただ、その建設にあたって、連合国の捕虜や現地の人々が、日本軍による劣悪な環境下における過酷な労働で 10 万人以上が亡くなっています。そういったことから「Death Railway」として世界的には有名です。日本人としてはその事実を認識した上で訪れるべきでしょう。（2018 年 1 月訪問／ tripadvisor.jp）

上記のコメントのように、多くのコメント投稿者がカンチャナブリを訪れる予定の人達に対して、訪問前に鉄道建設の歴史的背景を理解してから訪問することを勧めている。歴史的な知識を持たずに泰緬鉄道に乗車し、風光明媚な風景を体験して郷愁に浸ることは可能であるが、歴史的知識があるとより深い経験が可能となる、ということである。さらに、鉄道を連合軍捕虜やアジア系労働者を酷使させて建設させたのは日本軍であることから、日本人として歴史を理解してから行くのが礼儀である、というコメントや、カンチャナブリは想像以上に観光地化が進んでおり、単に鉄道に乗車したり鉄橋

を見学したりするだけでは歴史的背景を理解することはできない、というコメントもみられた。

4.3　カンチャナブリの戦争関連博物館の展示や説明に対する日本人観光者の反応

カンチャナブリにある戦争関連博物館三施設も、人気の観光スポットである。バンコクからの日帰りツアーの大半は､滞在期間は短い（約 10 ～ 15 分）がいずれか一つの博物館を訪問する。公共交通機関を利用してカンチャナブリを訪問する個人旅行者も、これらの戦争関連博物館を訪問することは泰緬鉄道乗車とクウェー川鉄橋訪問よりは重要度が低いものの、泰緬鉄道建設の背景と日本軍のタイや東南アジア諸国での戦略を理解するために、いずれかの施設を訪問する。多くの博物館訪問者は、カンチャナブリ訪問前にガイドブックや旅行情報サイトなどを通して、泰緬鉄道は日本軍が連合軍捕虜やアジア系労働者を酷使して建設させたものであることを理解しているものの、実際にこれらの博物館を訪問して展示や説明を目の当たりにして困惑するようである。これらの博物館の展示や説明に対する日本人観光者らの反応は様々である。コメントの内容分析を通じて、以下の通りのいくつかの異なる種類の反応があることが分かった。

タイプ 1：

最初のタイプの観光者は、第二次世界大戦中のカンチャナブリでの連合軍捕虜やアジア系労働者などに対する先祖の行動が残忍であったと認め、日本人として申し訳なく思うタイプである。彼らは戦争を悪であると非難し、戦争が二度と起こらないようにコメント内で祈る。我々はこの戦争について決して忘れてはならない、とも主張している。

旧日本軍がタイ - ビルマ鉄道構築の悪名高さを淡々と訴える博物館。日

本の学校や教育機関では絶対に教えない戦争の真実を被害者視点で伝える事が非常に印象的。こんなの日本人の名誉毀損だ！と訴える無知な日本人は未だに少なくないだろうけど、加害国として自分たちのあやまちを自覚し直すべきだと思わせられた。（JEATH 戦争博物館・2019 年 4 月訪問／ tripadvisor.jp）

戦争当時、人の命をなんとも思わない悲劇が至る所で行われていたのだろうと思います。しっかり過去に学び、現在未来に人が賢くなり同じような過ちが繰り返されないことを祈りたいと思います。（泰緬鉄道博物館・2018 年 3 月訪問／ tripadvisor.jp）

当時の捕虜の方々の写真と、思いだして描かれた暮らしぶりの絵が展示してあります。過酷な強制労働であったことがわかります。二度とこのようなことがおきないよう、日本人の代表のつもりで深く頭をさげてきました。今の日本人をせめることのない、静かな展示だと思いました。（泰緬鉄道博物館・2016 年 2 月訪問／ tripadvisor.jp）

タイプ 2：

このタイプの観光者は、先祖が引き起こした戦争の歴史について無知であることを反省するコメントを書いている。戦争関連博物館を訪問して沢山のことを学ぶことができたので、博物館の展示や説明に満足する傾向がある。これからカンチャナブリを訪問する人に対して、泰緬鉄道乗車前に博物館を訪問して歴史を学ぶことを強く勧めている。

事前の予備知識がほとんどないまま参加しましたが、日本人としてこのような歴史を知らなかった自分が恥ずかしくなりました。歴史を知り、実際の現場を見ることができて良かったです。（アートギャラリー＆戦

争博物館・2018 年 7 月訪問／ tripadvisor.jp)

説明書きに当時の過酷な状況があり読むと悲惨の一言に尽きます。この内容を知らずに加害者である我々日本人が列車付近で「ウェーイ！」とかやっちゃうと品位を疑われますので必ず先にこの博物館で知識を入れてから観光されることをお勧めします。(泰緬鉄道博物館・2017 年 10 月訪問／ tripadvisor.jp)

まだまだ知らない歴史がたくさんあることを知りました。(泰緬鉄道博物館・2015 年 3 月訪問／ tripadvisor.jp)

タイプ 3：

このタイプの観光者は、博物館の展示や説明を不快に感じている。彼らの泰緬鉄道の歴史に関する知識量には個人差があるが、日本が侵略者であることや悪であると表現されていることについて苛立ちを感じている。

第二次世界大戦時の資料やモノが多くあります。 しかし、私の所感ではカンチャナブリは映画の影響もあり、日本人が悪者というレッテルが張られています。少しはクンユアム[2)] の事例を見習ってほしいものです。(アートギャラリー＆戦争博物館・2017 年 12 月訪問／ tripadvisor.jp)

日本語では「泰緬鉄道博物館」ですが、英語では「DEATH RAILWAY MUSEUM」つまり死の鉄道博物館で、白い建物の外に英語のそれででかでかと書かれています。そしてこの博物館の真ん前は連合軍捕虜の共同墓地が広がっています。館内の展示品はカンチャナブリにある博物館ではビジュアル的に秀でており、お値段が高いのもある程度納得してしまいます。ただ展示されているものを超意訳すると、我々白人様（戦争が

始まるまで植民地の人々を何百年に渡り奴隷のように扱って犠牲者を多数出したことを忘れて）が、日本軍にジャングルが広がるここに連れてこられ、虐待されてこんなにひどい目にあってたくさん殺されましたとの趣旨のもので、そんなに気持ちがいいものではありませんでした。（泰緬鉄道博物館・2018 年 9 月訪問／ 4travel.jp）

タイプ 4：

このタイプの観光者は、博物館の展示や説明が史実とはかけ離れていることを主張したり、同盟国側からの一方向的な主張のみで偏見を助長するものであると主張したりする。彼らが批判する点は、博物館の展示や説明は連合軍捕虜の観点からのみ泰緬鉄道の歴史を説明し、日本軍とアジア系労働者の観点を無視していることである。このようなコメントを書いた投稿者の一部は、各博物館の展示や説明は日本に対する偏見を助長させたり誤った史実を伝えていることから、訪れる価値はないと主張している。

この博物館は旧連合国の意図からできたのかと感じる。インパール作戦[3] と愚行を犯したのは間違いないが、歴史をすり替えようとしているのではないかとも感じたのは私だけだろうか。（泰緬鉄道博物館・2017 年 12 月訪問／ tripadvisor.jp）

入ったところのエントランスの大きな壁に大きく世界地図が描かれています（図 7）。東南アジアを中心とした地図です。大東亜戦争中、日本軍がどこからどこに行ったのかその日付を調査し、赤い矢印で詳細に示しています。白い背景に黒線での地図、そこに赤色は極めて目立っています。第二次世界大戦前は、イギリスはミャンマー、インド、マレーシア、シンガポールを植民地としていました。オランダはインドネシアを。アメリカはフィリピンを。そしてフランスはベトナム、ラオス、カンボ

図７　泰緬鉄道博物館エントランスに掲げられている日本軍のアジア侵略を説明する地図

2019 年 8 月筆者撮影

ジアを植民地としていました。これら欧米諸国がいつ東南アジアのどこに入って来て、植民地としたのか？植民地時代、原住民の人たちにどんな労働を課して、何人お亡くなりになられたの？こんなことには、全く触れていません。このバカでかい大きな地図で分かるのは、戦時中の日本軍がどう動いたのかということだけです。この地図で言いたいこと、焦点を絞ってますね。このエントランスは無料。誰でも入ってこの地図は見ることができるんですね。これが反日プロパガンダ博物館なんだなと直感しました。入口を入って１階、２階に資料展示がされています。やせ細った人の写真もたくさん展示されていました。写真撮影厳禁なので、これら写真が当時のこの場所で本当に撮られたものか、合成写真なのかどうかは残念ながら検証できません。地球の歩き方にこう書かれています。「この工事のために亡くなった人々は、連合軍の捕虜よりも東南アジア諸国から徴用された人たちのほうがはるかに数が多かったこ

となどをアピール。」とあります。この博物館がアピールしたかったことは、はたしてこんなことだったのでしょうか？私は、そうは思いません。この博物館がアピールしたいことは別なところにあると考えます。それは「日本を叩く」ではないでしょうか。そして欧米から来た観光客に、アジアからの観光客にアピール・洗脳するのが目的？（中略）博物館名が建物の外壁一面に大きく書かれています。「DEATH」。こんな名前、よく付けましたね。印象操作という言葉がぴったり当てはまります。（泰緬鉄道博物館・2017 年 2 月訪問／ 4travel.jp）

タイプ 5：

このタイプの観光者は、これらの戦争博物館の展示や説明に対して特別な反応や感情は抱かない。その理由は、展示が無秩序で一貫性が無く理解し難いこと、展示写真の管理状態が悪く色あせて見えにくいこと、さらに日本語での説明が無いため理解できなかったり、貧弱な日本語で説明されていることから良く理解できなかったりするからである。

ツアーの一環として訪問。展示されているものにあまり見所はないかなという印象。説明も明らかに間違っている箇所がちらほら。あまりきちんと管理されてる感じはしませんでした。（JEATH 戦争博物館・2018 年 7 月訪問／ tripadvisor.jp）

展示はいろいろなものがごちゃ混ぜに置いてあり、非常に申し訳ないけれど一言でいえば雑。（アートギャラリー＆戦争博物館・2017 年 4 月訪問／ tripadvisor.jp）

クワイ川鉄橋観光の時間が迫っていたためか、切符売り場の右の掘立て小屋のみ見学した。あまりに貧弱な展示（写真のみ）にあきれて、ここ

を後にした。(JEATH 戦争博物館・2016 年 6 月訪問／ tripadvisor.jp)

展示物は中々多いですが、乱雑に並べられているだけといった感じで、博物館とは呼び難い気がします。人形を使った展示も多いですが、日本人にとっては良い展示とは言えないと思います。中立的な観点からの展示かどうかなどはさておいても、そこまでの価値は無いように思います。(アートギャラリー＆戦争博物館・2016 年 6 月訪問／ tripadvisor.jp)

戦争の悲惨さは確かに描かれているのですが、時系列が乱れていたり、見せ方がバラバラだったりで、気張らずに見ることは出来ますが良くも悪くもタイクオリティだなとは思いました。(JEATH 戦争博物館・2015 年 8 月訪問／ tripadvisor.jp)

アジアの地方都市の博物館らしいチープな作りです。そのためか日本人の強制労働など、悲惨な内容の展示もありますが、チープさゆえ切迫感はあまりないです。建物がいくつかあり、順路がわかりづらかったです。(アートギャラリー＆戦争博物館・2016 年 1 月訪問／ tripadvisor.jp)

5. 議論と結論

ほとんどの日本人観光者は泰緬鉄道が日本軍によって建設されたという歴史的事実を知ったうえでカンチャナブリを訪問している。しかし、彼らの主要な訪問理由は、「理想的」で「倫理的」なダークツーリズムサイト訪問者の行動とされる歴史をより良く理解し犠牲者を悼むことよりも、単に映画で有名な場所を訪問し、映画の主題となっている鉄道に乗車し、風景を鑑賞するというレクリエーション的側面の方が強い。泰緬鉄道に乗車してクウェー川鉄橋を見たり歩いたりする限り、第二次世界大戦期の悲劇的な場所

としての雰囲気は感じとることはできていない。現在観光鉄道として人気を博している泰緬鉄道は、自分たちの先祖が多くの外国人を酷使して建設されたものである、ということに対して複雑な思いを示す人は多いが、大多数は有名な観光鉄道に乗車し、有名な橋を見たり歩いたりし、それらを通して得られるわずかなインフォテイメント（楽しませる形で事件や事実を伝える手法）に満足している。つまり、第二次世界大戦時の同地に関する歴史的背景に関しては無視される傾向があり、そもそも、カンチャナブリをダークツーリズムの場所とは見なしていない人が多い。カンチャナブリの日本人観光者のこの特徴は、観光開発戦略とその地域の商業化と関連性がある。タイ国政府観光局（TAT）は、カンチャナブリをダークツーリズムの場所ではなく、リゾート地として積極的に宣伝している（岩田, 2002）。Braithwaite and Leiper（2010）、Arrunnapaporn（2011）や Lennon（2018）などは、カンチャナブリの過度の商業化・商品化を批判している。彼らは、過度の商業化・商品化が現地の第二次世界大戦期の負の歴史の場所としての価値を低下させ、信憑性があいまいになっていると指摘する。

一方で、「ライト」な観光者と表現可能な多くの日本人観光者がカンチャナブリの戦争関連博物館（JEATH 戦争博物館、アートギャラリー＆第二次世界大戦博物館、泰緬鉄道博物館）を訪れた時、自国に対する批判的な展示や説明に直面して、様々な反応を示した。第二次世界大戦中のカンチャナブリでの先祖の行動を戦争加害国の国民として申し訳なく思う観光者や、先祖が引き起こした戦争の歴史について無知であったことを反省する観光者は、博物館の特定の政治的解釈の内容と説明を受け入れる傾向がある。この姿勢は、公式にも個人的にも、戦争に対する日本の伝統的な姿勢とやや一致している。日本人は公然と戦争について議論することを躊躇し、中学や高校では第二次世界大戦史について学ぶ機会を欠いていたが、外国への戦争の責任を認め、そしてより良い社会のために平和の重要性を主張する傾向がある。一方で、博物館の展示や説明が史実とはかけ離れていることを主張したり、同

盟国側からの一方向的な主張のみで偏見を助長するものであると主張したりする観光者の中には、戦争加害者と被害者の両方の観点から歴史をより中立的に理解すべきであり、博物館の展示や説明も中立性が重要であると主張する者もいる。これは、日本人が日本人自身を侵略者・悪として捉え、特定の歴史観を批判・否定して歴史の負の側面を強調する自虐史観を改め、第二次世界大戦史をより「ポジティブ」な語りに変革しようとする歴史修正主義的な立場といくらか一致している。さらに、日本が侵略者であることや悪であると表現されていることについて苛立ちや不快感を示す観光者もいる。

注目すべきことは、展示が無秩序で一貫性が無く理解し難いこと、展示写真の管理状態が悪く色あせて見えにくいこと、さらに日本語での説明が無かったり、貧弱な日本語で説明されていることから良く理解できなかったりしたことから、戦争博物館の展示や説明に対して特別な反応や感情は抱かない者が数多くいることである。これは、戦争関連博物館の日本に関する批判的な展示や説明に対する日本人観光者の反応は、展示や説明のわかりやすさに大きく影響されることを意味している。彼らは第二次世界大戦期の歴史に対する知識や明確な態度を持っておらず、展示や説明に対する反応は受動的である。

ダークツーリズムサイトでの展示や説明は地元の政治的およびイデオロギー的な立場を反映するものであり、過去の悲劇的な出来事に対する特定の政治的解釈を訪問者に提供することとなる（Sharpley, 2009)。このような特定の政治的解釈に対して、訪問者は自分自身の立場や知識・態度が軸となって、様々な反応を示す。学校の歴史の授業を通して得られた知識やメディアを通して形成された知識、さらに知識の上に成り立つ過去に対する態度が、カンチャナブリの戦争関連博物館を訪れる日本人観光者の反応を形成させる要素となっている。さらに、過去の悲劇的出来事の解釈は、利害関係者の立場によって大きく異なることから、それらはしばしば不協和と対立を引き起こす。第二次世界大戦に関わるダークツーリズムサイトにおいては、観光

者が戦争を仕掛けたとされる国々（日本・ドイツ・イタリアなどの枢軸国）から来ていて、地元の人々が戦争を仕掛けられたとされる国々（イギリス・フランス・アメリカ・ソ連を中心とする連合国）にいるとき、不協和と対立は特に顕著であろう。

現在のダークツーリズム研究では、過去の負の出来事における被害者・犠牲者側からの研究は比較的多いが、その場所を訪れる訪問者側からの研究（訪問者の訪問動機・行動・経験・学習・満足などに関する研究）はそれほど蓄積されていない。さらに、ダークツーリズム研究において、過去の負の出来事の観光利用や保存・展示・説明方法をめぐる被害者・犠牲者側の利害関係者間の不協和や対立に関する研究は多いが、本稿で考察した戦争加害国とされる国からの観光者と被害国とされる国に住む地域住民（博物館運営者）という構図が成り立つ時の両者間の不協和や対立、さらに観光者の反応に関する研究は蓄積されていない。将来のダークツーリズム研究では、戦争被害国とされる国の戦跡や戦争関連博物館を訪問する、戦争加害国とされる国からの観光者のダークツーリズム経験を理解することも重要であると考えられる。

付記

本稿は、International Conference on Tourism and Cultural Heritage in Asia（2018年８月，於：立命館大学衣笠キャンパス）の会議論文を和訳し、一部加筆修正したものである。

注

１）戦後、泰緬鉄道はミャンマー国内の全線とタイ側の国境から３分の２程の区間が廃止された。現在はタイ国鉄南本線の支線として、バンコクのトンブリー駅からナムトック駅までの 194km が使用されている。

２）クンユアムとは、タイ北部メーホンソーン県にある郡である。第二次世界大戦中、ビルマ作戦の重要な拠点であった。道路建設のために多くのタイ人労働者が過酷な労働

に耐え、多くの地元労働者が亡くなった場所である。しかし、日本軍と現地住民との関係は良好に保たれており、多くの深い人間性のある交流が生まれた。今日でも当時からの友好と友情の交流は続けられており、「タイ日友好記念館」(戦争関連博物館)が開設されている。

3)インパール作戦とは、第二次世界大戦のビルマ戦線において、1944年(昭和19年)3月から7月初旬まで行われた作戦である。援蒋ルート(イギリス・アメリカ・ソ連などが中国の国民政府軍を援助するために物資を輸送したルート)の遮断を戦略目的として、イギリス領インド帝国北東部の都市であるインパール攻略を目指した。しかし日本軍はインパールに一人もたどり着けず、約3万人が死亡した。

参考文献

岩田隆一(2002)『タイ観光論』くんぷる

遠藤英樹(2016)「ダークツーリズム試論:「ダークネス」へのまなざし」『立命館大学人文科学研究所紀要』(110), 3-22

吉田裕(2005)『日本人の戦争観―戦後史のなかの変容』岩波書店

Arrunnapaporn, A.(2011). 'Authenticity versus Commodification: Atrocity heritage tourism at the 'Death railway' of the River Kwai'. *Historic Environment,* 23(2): pp. 38-41.

Arrunnapaporn, A.(2012). 'Atrocity Heritage Tourism at the "Death Railway"'. *Journal of the Siam Society*, 100: pp. 257-268.

Banyai, M. and Glover, T. D.(2012). 'Evaluating Research Methods on Travel Blogs'. *Journal of Travel Research*, 51(3): pp. 267-277.

Bode, I. and Heo. S. E.(2017). 'World War II Narratives in Contemporary Germany and Japan: How University Students Understand Their Past'. *International Studies Perspectives*, 18: pp131-154.

Braithwaite, R. W. and Leiper, N.(2010). 'Contests on the River Kwai: how a wartime tragedy became a recreational, commercial and nationalistic plaything'. *Current Issues in Tourism*, 13(4): pp. 311-332.

Fackler, M.(2015). U.S. Textbook Skews History, Prime Minister of Japan says. https://www.nytimes.com/2015/01/30/world/asia/japans-premier-disputes-us-textbooks-portrayal-of-comfort-women.html(2018年9月4日参照).

Lennon, J.(2018). 'Kanchanaburi and the Thai-Burma railway: disputed narratives in the interpretation of war', *International Journal of Tourism Cities*, 4(1): pp. 140-155.

Lennon, J and Foley, M.(2000). Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster, London: Continuum.

Lonely Planet Publications.(2012). Lonely Planet Thailand, Melbourne: Lonely Planet

Puelm, F.(2015). "The Bridge on the River Kwai" – Memory Culture of World War II as a

Product of Mass Tourism and a Hollywood Movie. http://www.human.ru.ac.th/grad/images/pdf/2558-4-2/FelixPuelm.pdf（2018 年 7 月 2 日参照）

Rungchawannont, M.（2015）. A Journey to the Past: An analysis of contemporary display of the Death Railway, Thailand. https://openaccess.leidenuniv.nl/bitstream/handle/1887/35525/FinalFinalDeathRailway.pdf?sequence=1（2018 年 7 月 2 日参照）

Sharpley, R.（2009）. 'Shedding Light on Dark Tourism: An Introduction': In Sharpley, R, and Stone, P（eds）*The Darker Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, Bristol: Channel View Publications: pp. 3-22.

Stone, P and Sharpley, R.（2008）. 'Consuming dark tourism: A Thanatological Perspective'. *Annals of Tourism Research*, 35（2）: pp. 574-595.

Williams, S and Lew, A.（2015）. *Tourism Geography: Critical Understandings of Place, Space and Experience*, Oxford: Routledge.

Witcomb, A.（2016）. 'Cross-Cultural Encounters and "Difficult Heritage" on the Thai-Burma Railway: An Ethics of Cosmopolitanism rather than Practices of Exclusion': In William, L, and Craith, M（eds）*A Conpanion to Heritage Studies*, Chichester: John Wiley & Sons: pp.461-478.